

【佳作】

いっちょうら

中井香奈江・大阪府

クリーニング店の受付をするようになつて五年になる。

高齢になつた両親の家業を手伝い始めたある日、年配の男性が小さい紙袋を提げ、遠慮がちに店の前に立つていた。色のあせたポロシャツにジャージーで、四角い顔にしわをよせ、お辞儀をするように入つてこられた。そして節くれた手で丁寧に取り出して、カウンターの上に白いシャツとグレーのズボンが置かれた。きちんとたたまれているが、何十年も前の古めかしいデザインであつた。シャツにシミはないがやや黄ばみ、衿や袖口はすり切れて、ボタンが一つない。ズボンも裾の生地が傷んでほつれていた。

「恥ずかしいけど、ワシの『いっちょうら』ですねん」

そう言つて下を向かれたので、点検のためじろじろと品物を観察していた私は恐縮した。そして、「長い間、大事に着てはるんですね」と言つて、番号タグをつけた。

預かり伝票に書く名前をたずねると、「山下」と安心したような声が返つてきた。伝票をたたんで財布にいれる仕草は、誇らしげにさえ見えた。

シャツとズボンを洗つた後、私はできるだけの修理を施した。ボタンをつけ、表から見えないように手縫いでほころびを繕つた。アイロン仕上げをすると、山下さんのシャツとズボンは、無精ひげをそつたように若返つていた。

三日後、引き取りに来た山下さんは、きれいになつた品物を丁重に紙袋にいれ、うれしそうに帰られた。その翌日、『いっちょうら』さんは、目で会釈しながら、私のいる店の前を通られた。少し丸い背中が、すくと伸びて見えた。それ以来山下さんは月末に一度だけ、いつも同じシャツとズボンを持つてこられた。毎回新たなほころびが出来るので、私も毎回ほころびへ針を入れた。一日でも長く着てもらえますように」と願いを込めて。いつのまにか、私にとても愛着のある、いっちょうらの品物になつていつた。

しだいに、山下さんと世間話をするようになつた。近所の文化住宅で一人暮らし、仕事は夜勤のビル警備。ただ、親族や過去の話は聞いたことがなかつた。「おしゃれをして、いったいどこに行きはるんですか?」あるとき思い切つて、山下さんに聞いてみた。

「実はな……月に一回、初恋の人に会いに行くんや」「デートですか」とたずねてみると、

「いや。遠くから見てるだけや。会わんほうがええんや」

と、そう言いながら、まるであこがれのアイドルの話をするように、初恋の人の様子を話されることもあった。

一年が経つた頃、山下さんは突然来られなくなつた。入院したらしいと近所で聞くも病院が知れず、預かつたままの品物と一緒に山下さんの来店を待ちつづけ、一年が過ぎた。

その頃、一人の女性が、山下さんの伝票を持つて来られた。

親族と聞いて、私は奥の棚から、山下さんの品物と、ポケットに入つたままになつていた黒革の定期入れを持ってきた。

すると女性は定期入れ中をおそるおそる確かめて、入っていた数枚の紙切れを取り出して広げた。子どもが描いたのであろう絵や印字のうすいレシートなどをの中に、折りたたまれてボロボロの白黒の写真があつた。

写真是、遊園地で幼い女の子を抱いた若い山下さんだつた。

目の前の白いシャツとグレーのズボンを着ていた。

「お父さん……」

女性は涙声になつて、そうつぶやいた。

女性は山下さんの娘さんだつた。父と娘は長年生き別れのままだつたそうだ。残念ながら、娘さんは病院で、亡くなつてしまつた山下さんと再会したのだと言われた。

私は、初恋の人の話をした。

「もしかしたら……それは私のことかもしれません。時々、家まで様子を見に来ていたのでしょうか……」

娘さんの手には、住所が書かれた小さな紙片があつた。